

「大変」な時代

企業経営漫談士 岡野実空

『大変な時代』は、1995年に出版された故堺屋太一氏のベストセラー。二匹目の泥鰌を狙った？2011年の堀井憲一郎氏『いつだって大変な時代』には思わずニヤリとしましたが、どちらも、冷戦終結後の「大きな変化」を短縮した巧みなネーミングです。もっとも何が「大変」かは、時代や地域、テーマによっても違うので、ここは皆さんのビジネス目線に合わせ、「グローバル化」「システム化」「IT・デジタル化」の切り口で、「大変」を考えます。但し今回は3つを概観するに止め、個別の変化は別途考察することになります。

変化1. グローバル化

「国際化」は、高度経済成長時代さかんに使われた表現ですが、最近はやや影が薄くなっています。いまや「グローバル化」が一般的で、それがさも当然のように使われていますが、これは結構、「曲者」。中国語でいう「全球化」企業は、果たして世界に何社存在するのでしょうか？実際のところ、地球の隅々に進出し、しっかり活躍している企業は、恐らく十指に満たないでしょう。

「グローバル化」の是非が問われる現在、我々はその言葉の安易な使用を止め、「国際化」を厳密に見つめ直すことから始める必要があります。

変化2. システム化

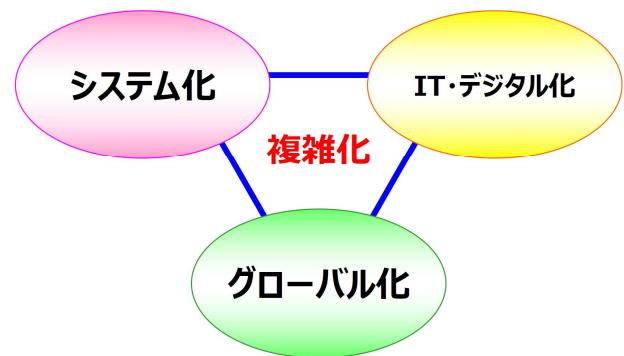
「システム」とは、ある「目的」を達成するために「機能要素」を「適切に結びつけた」複合体のことです。日本語の「仕組み」同様、実に安易な使い方がされ、文系中心にコンピューターのことと勘違いしている人も多数存在します。しかしそんな経営者が采配を振るう企業に未来はありません。なぜなら、「経営」はヒト、モノ、カネ、その他要素の有機的複合体であり、しかもいま複雑化が加速しているからです。

従って、構成要素を分けて考える「論理的思考」だけで「大変な時代」を乗り切ることはできず、それを超えた有機的な関係の「システム思考」が、企業の成否を決めるカギになったのです。

変化3. IT・デジタル化

「大変」のトリはIT化、とりわけ「デジタル化」です。これは企業における情報処理と通信のコストを劇的に低下させました。さらにインターネットと高速ロジスティクスの発達により、様々な産業のライバルが世界のあちこちに出現し、我が国の主要な企業を苦しめるようになりました。

KM1-1 「大変」な時代



例えば、戦後産業のON(王と長嶋、まだ通じるか?)コンピ、自動車と電機業界の内、後者は早々に引退を迫られる中で、長嶋氏同様、重い病に倒れ、いまだその後遺症に苦しんでいます。また世界の王?自動車にとっても他人ごとではなく、電気の流れがひたひたと押し寄せているのはご存知のとおりです。

ONに頼った巨人同様、我が国は次世代産業の育成に後れを取り、失われた10年が20年、さらに間もなく30年になろうとしています。前世紀末、国の産業政策を「V9不況」と皮肉った加護野先生の名言が、まだ生きていることに愕然とします。あらゆるモノ、サービスがインターネットで繋がる「IoT」に向かい、「もっと大変」な時代になることが予想されるいま、ITを「イット」と読んだ元首相のシン(森)ゴジラが、いまだ社会を跋扈しているなど、あってはならないこと!

「大変」な時代の主役は、古今東西を問わず、若き志士たち。出でよ、シン・ソニー!シン・ホンダ!

2019年7月16日(初出平成29年4月17日) 実空